

畑 正憲
ムツゴロウの
動物王国



ムツゴロウの動物王国

定価 五〇〇円

昭和四十八年三月二十五日 印刷

昭和四十八年四月五日 発行

著者 畑 正憲

編集人 浜田 琉司

発行人 朝居 正彦

発行所 毎日新聞社

〒一〇〇 東京都千代田区一ツ橋

〒五三〇 大阪市北区堂島上

〒四五〇 名古屋市中村区堀内町

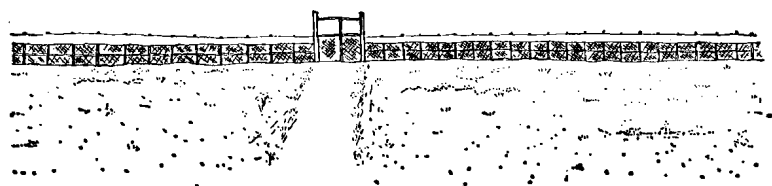
〒八〇二 北九州市小倉区紺屋町

印刷 東京ベル印刷 製本 大口製本

0095-507006-7904

ムツゴロウの動物王国
目次

建国宣言	8
いよいよ第一歩を	10
出入国管理法	17
遺憾千万	23
チビ丸商店	30
新しい家よ　さらば	36
施政方針演説	42
腹ふくるる業	48
大難産とちやうかしら	54
ポニーテールの女の子	60
友への手紙	67



居間の海獣

体育の日

国立衛生局汲取王

尾ひれ・背びれ

禁じられた子

いびきを残して

真夏の昼の夢

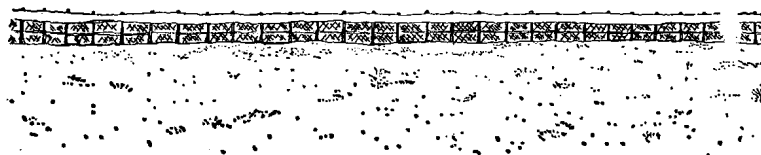
キッツキの信号

大王の大演説

お美しきお大便

ある恋の物語

137 130 124 118 112 106 99 92 86 79 73



来年もまた

144

五輪覚書

151

ちよんちよん

157

ロコのロボ

164

大王多忙の記

171

大解剖記

178

クマに乗った兄弟 上

185

クマに乗った兄弟 下

191

ボスの記―春

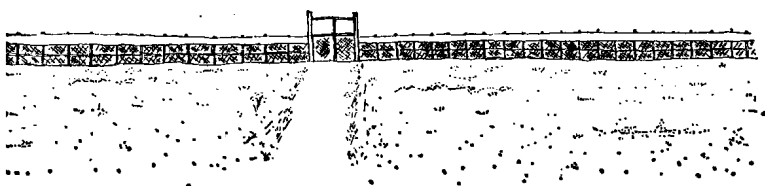
198

ボスの記―夏

205

ボスの記―冬

211



わが町の周辺

募集その後

小さな大騎手

走れゴンベよ

座談会 建国の総括

243 236 229 223 217



装幀・イラスト

著者

ムツゴロウの動物王国

建 国 宣 言

私、並びにムツゴロウ一族は、この北の地に動物の国をつくることを宣言する。

敷地は最低百町歩、三十万坪とし、その中に動物の飼養設備、研究室、解放区を設ける。目的は侮蔑^{あはれ}され、虐げられている動物の復権であり、傷ついたり親にはぐれたりして自然から落ちこぼれた動物を収容する。それらの動物は、私たちの手によって手当てされ、自然へと返されるであらう。また当然のことながら、解放区に於ては繁殖についても考慮される。

当王国の運営は原則として私的な資金によるが、動物の保護、並びに繁殖について公的な機関から要請があれば、いつでも協力を惜しまぬつもりである。私たちは最大の努力を払うことを約束する。

私たちは理屈よりも行動や経験を重視する。動物を育て守るためにはそうする他はないのだ

が、といって狭い世界に閉じこもっていいものではなく、見聞を広く世界に求めなければならぬ。そのためには、ム動物王国の支国を世界の各地に設けることになろう。二年か三年後には、私たちのだれかがそこに住みつくはずである。

なお、収容する動物は野生動物に限りた。家畜の類では馬を殖やし野性的な群れをつくってみたいが、特殊な場合を除いて、犬や猫は引受けない。犬や猫を途中で手放すことには反対だからである。

かくも野望は大きい、ここ当分は施設の拡充に忙殺されることになる。私たちは数十の建物が必要としている。この間、鎖国令を発布する。ただし、人間以外の動物の出入りは自由である。当王国の門扉は、動物に向かって大きく開かれている。

昭和四七年四月一日

ム国王 畑 正憲

いよいよ第一歩を

四月一日。――

大ぼらを吹いても天下に公認されるエープリル・フールの日には雪で明けた。冬の間中、もっと降れもっと降れと願っていたのだが、この日ばかりは晴れて欲しかったのに。

今年は暖冬異変とやらで、三月の半ばからバカ陽気が続き、四月に入ったらすぐにでも花の便りが聞けるのじゃないかと期待していた。それなのに、こともあろうに三月の三十日が三十センチの積雪。三十一日も午後から吹雪。私は移転作業を引受けてくれた建設会社に電話したり、空を仰いだりして、何事も手につかない有様だった。眺めていても、どうしようもないのに、落ちてくる無情の雪を見つめつつ、とうとう徹夜してしまった。

動物王国。



そういつてもわからない人にはわからないだろうし、実のところ、私自身にもよくわかっていない。しかし、わからないながらも、その計画は熱いかたまりとなって、ここ十年ばかり私を支配していた。単純明快に悲願といってもよい。

雑誌などの紹介記事では、私はエッセーの賞をいただいてから、勤めていた会社をやめたことになっているが、実はそうではない。その数カ月前にやめていた。

退社のきっかけになったのが、この動物王国の計画である。その必要性をめんめんとつづり、社長に直訴した。年に数千万円を投資して私を王様にしてくれと願いでたのである。

しかし、ちゃんとした企業の主なら、だれだって屑につばをつけ、給料を与えて飼育していいかどうか疑うに違いない。それが健全な常識というものである。退社前後の事情を考え合わせると、途方もない直訴をしたことが引金になり、私はフリーになるお許しを得たものと理解している。

それから五年の歳月が流れた。

私は十数冊の本を世に問い、その印税を貯えた。そして、北海道へ移住してからは、町や村で人に会うたびにこういつてきた。

「広い格安の土地はありませんか」

反応は十分だった。

「私の山林の周辺はいかがでしょう。あなたが住んでくだされば、盗伐が防げるだけでもありが

たいのですが」

「広さは」

「五、六千坪はありましようか。北海道には竹がないので、やっとこれからという若木を盗まれてしまうのです」

「六千坪ですか」

その広さは、私には十分過ぎるように思えた。現場を見にいったら、ミズバショウが咲き乱れる沢の横にある合地で、日本一の土地のようだった。しかも、借地料は永久に無料でいいのとのことだった。

次に舞いこんだのは、ニシン成金の別荘跡である。廃屋つき、荒地五町歩で年に二十万円という条件。これにも心が動いたが、横に続いている絶好の牧草地は貸せないというのでお断わりした。

それから、いろいろと人に会った。そのたびに用地が広くなったり狭くなったりした。が、それでわかったのは、不確かな変てこな情熱ほど理解してもらえないことだった。

私はこう説いた。

「どんなものになるかわかりませんが、私は自分の理想を大地に描いてみたいのです。どうか広い土地を無料で貸してください」

すると、世間は広いものだ。ある日、対岸から村の代表だという老人がやってきて、共同放牧

地として使用していた土地を、無料で使いなさいといってくれた。現場は浜中町のはずれにある海岸段丘。広さは四十五町歩。一町は三千坪だから、約十三万坪。上野の動物園だって約四万坪の広さしかないのだから、かなりの土地だ。

沢あり、丘あり、林あり、夢想していた条件とピッタリだった。オオハクチョウが飛来し、タシロウが繁殖する沼があるのは大きなおまけだ。

そろそろ建設にとりかかるべき時も迫っていたし、私たちは契約書を取交わした。無料という条件をつけて。

しかし、ありがたいのはその好意であって、無料で使ってよいものではなからう。私は町が町民に牧野を貸与する価格を調べ、その二十倍を支払うことにした。欲しいのは無料でいいという心意気であり、甘えてよりかかるのはきらいだ。お金は使うものだし、たくさん入用になれば、天から降ってくるものでもある。

以来、土地は着々とふえている。百万坪になったと思うのも束の間、やがて二百万坪の声もかかるようになっている。この広さについては、諸契約が完成してからご報告したい。

さて土地で味をしめたので、家や動物舎についても同じ手を使った。浜中町で一番大きいというK建設会社の社長をつかまえて、まずこういった。

「私が信用出来ますか」

「は？」

「信用してくださいよ」

「ええ。まあ……」

「では家を建ててください」

「それはお建てしますよ。商売ですから」

「じゃ決めました。代金は将来必ずお払いますから。信用と信用。これでいきましょうよ。人と人。その最も美しいつながり方は信用を土台にしたもの。それでいきましょう」

「はあ……」

社長さんは心もとない返事をして、それから三日後に会ったらしい。

「あなたの話を聞いていたら、こう、頭がぼうつとして夢を見ているみたいです。いいでしょう、私も北海道で大地と取組んできた男です。やってみましょう」

家は別棟の書斎と書庫を入れて延べ百坪。電力をフルに活用したセントラルヒーティング。快適なものでなければならぬ。

それは、個人の住宅としては浜中町で大きな方に属している。設計図を見た時、社長は目を丸くしていたが、ともかく秋に着工し、三月の末には完成してしまった。

敷地は太平洋に面した高台の白樺の林の中にある。湯沸岬、懐かしの嶮暮帰島が見渡せる最高の場所だ。北国の花という花が、まわりに咲くだろうし、付近に人家は一軒もない。なにしろ電話をひくのに、用地の入口から六キロある。道路だって自分でつけねばならない。これで王侯貴